ま　え　が　き

小麦やコメと並ぶ三大穀物の１つであるトウモロコシの用途は，ほかと比べると非常に幅広い。中南米や東南部アフリカのように現在でも主食として消費している地域がある一方，多くの国では主に飼料の原料として使われる。さまざまな加工食品や工業用資材の原料としても使われている。そしてアメリカではバイオエタノールの原料としての消費が急速に増えている。

2008年に食料危機が論じられた際，おもに分析されたのは，主要穀物の国際市場における価格動向や主要国における生産・消費の動向である。その際，均質なコモディティとしての穀物が想定され，市場原理によって価格や需給が決まるという仮定にもとづいて分析が行われた。

果たしてこれらの分析だけで，途上国のトウモロコシ需給を理解できるのだろうか。中南米の農業部門に注目する研究者として，このような疑問を覚えた。それはこれらの研究が，トウモロコシの供給と需要の多様性をほとんど考慮していないからである。中南米だけをみても，メキシコの主食であるトルティージャの原料となる在来種の白トウモロコシと，アルゼンチンのパンパで遺伝子組換え種子を用いて栽培される黄トウモロコシでは，種類，生産者，規模，技術，用途，消費者などが大きく異なっている。国や地域ごとのトウモロコシ需給の特徴や多様性に注目することで，食料需給の分析に新しい視点を提供できるのではないかと考えた。

そこで，途上国を中心に各国の農業に詳しい研究者の参加を得て2009～2010年度にアジア経済研究所において「『食料危機』と途上国におけるトウモロコシの供給体制」研究会を実施した。本書はその成果である。

研究会ではトウモロコシに関する様々な専門家を講師として招聘し，分析の基礎となる情報の収集に努めた。飼料輸出入協議会専務理事の江藤隆司氏

にはトウモロコシを中心とする世界の穀物需給と物流，畜産草地研究所飼料作物育種研究チーム長の佐藤尚氏には飼料作物としてのトウモロコシの特性，農林水産政策研究所食料領域主任研究官の古橋元氏には需給モデルにもとづいた世界の食料需給見通し，明治大学農学部客員教授の坪田邦夫氏には新興国における穀物需給，ユニパックグレイン代表取締役・國學院大學経済学部教授の茅野信行氏には食料危機と穀物メジャーの役割についてお話をいただいた。また，穀物貿易の物流面での理解を深めるために，千葉港にある日本サイロ株式会社の施設を見学し，その役割を説明いただいた。このほかにも各研究者が調査対象国で数多くの方々に話を聞いた。ご協力をいただいた方々に深くお礼を申し上げる。

くわえて，本研究会にオブザーバーとして参加し議論を深めてくれたアジア経済研究所の星野妙子，久保研介，塚田和也，佐藤千鶴子の各研究員，東京大学大学院博士課程の張馨元，東京農業大学大学院博士課程の吉田貴弘の各氏にも感謝したい。

なお，食料危機や穀物需給に関して，アジア経済研究所は以下の成果も発表している。本書と合わせてご参照いただきたい。

重冨真一・久保研介・塚田和也『アジア・コメ輸出大国と世界食料危機―タイ・ベトナム・インドの戦略―』（アジア経済研究所，2009年11月）。

清水達也編「食料危機と途上国におけるトウモロコシの需要と供給」調査研究報告書（アジア経済研究所，2010年３月）（研究所ウェブサイトよりダウンロード可）。

「特集：途上国の穀類輸出―その現状と課題―」『アジ研ワールドトレンド』No. 175（2010年４月）。

2011年６月

編　　者